

「苦しみを共にして」

2022年7月3日

フィリピの信徒への手紙4：10-14

佐々木 佐余子

今朝は部落解放を覚えて礼拝を献げています。早く部落差別がなくなるように祈りを合わせたいと思います。

まず最初に今朝与えられた御言葉から学びます。パウロは感謝を述べています。贈り物を通して、どんなにフィリピの皆さん方が、パウロの伝道に尽くしてくれたのかパウロは身に染みて感じ感謝しているのです。何を贈られたのかはわからないのですが、多分金銭的なものや物品ではないかと思います。そのことをパウロはとても喜んだのです。今までは感謝しつつもそれを言葉にして表す機会がなかったのですが、パウロの贈り物に対する気持ちは使徒としてまず神に感謝しているのです。それで11節から13節までパウロの胸の内が明かされます。「物欲しさにこう言っているのではない」と言っている心境に複雑なパウロの心理が垣間見えます。11節にパウロは自分の置かれた境遇に満足することを覚えたと言っています。12節「貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています。満腹していても、空腹であっても、物が有り余っていても不足していても、いついかなる場合にも対処する秘訣を授かっています」と語ります。対処する秘訣とはどのようなものでしょうか。鍵は13節にあります。「わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です」と言い切っています。すごい信仰です。パウロはこのように言っているのです。「わたしに復活の力を与える方が、すべてのことをすることが出来る」と言っているのです。その心境を弟子テモテに語ります。テモテに宛てた手紙の中でこのようにパウロは書いているのです。「わたしを強くしてくださった、わたしたちの主キリスト・イエスに感謝しています」と。パウロがまだイエス・キリストを知らない時、パウロは神を冒瀆し、迫害し暴力をクリスチャンに振るったのです。けれど、主の憐れみが、あふれるほど与えられ信仰と愛と共に生きるようにされたのでした。そのようなイエス・キリストによって、何事にも耐えられる力が与えられたと言います。であるから生活するにいろいろなすべを知っていると言ったのです。すべとはなんでしょうか。すべとは術のことです。パウロはどんな状況に置かれても満足するすべ、術を知っているのです。術と言うと何だか魔法をかけるに似ていますね。例えば、食べ物不足している時もパウロのすべを使って満足する境地になれるのでしょうか。すごい業です。パウロはいついかなる場合にも対処する秘訣を授かっているのです。わたしは思い出すのですけれども、パウロは第3の天にまで到達したことがあると言っています。確かコリント書だったと思います。コリントの信徒への手紙二12：1～2節にあります。そこを讀んでみると「わたしは誇らずにいられません。誇っても無益ですが、主が見せてくださった事と啓示してくださった事について語りましょう。わたしは、キリストに結ばれていた一人の人を知っていますが、その人は14年前、第3の天にまで引き上げられ

たのです。体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じです」とあるのですが、この人はパウロなのです。パウロは樂園にまで引き上げられ、人が口にするのを許されない、言い表しえない言葉を耳にしたと言います。14年前と言うのは紀元40年か41年頃でパウロが回心して、最初の伝道旅行に出かける前のことで凡そ、34歳頃だと思われます。その頃、宗教的に特異な神秘的な体験をしたのです。第3の天とは天の一番上の天という意味です。この天は樂園、パラダイスとも訳されていますが、天国、神の国と同じ意味です。神さまから特別な体験を与えられた人ですから、いついかなる時でもなすすべは知っているのだと思われます。とこのように語っていますが、パウロが今まで受けた支援は、お互いの人間的な気持ちだけではなく、神がフィリピの人々を通して与えてくださった贈り物だと受け取り感謝しているのです。

昔、こういう話を聞いたことがあります。その方は教会の長老であり、教会学校の教師であり、様々な奉仕をされていました。その方の夫人は付属幼稚園の教師であり、奏楽者であり、婦人会の役員でした。その夫人は仕事があるのでいつも帰宅が遅かったのです。慌てて食事を作るのであまり揃ってなかったかもしれません。けれどご主人は言うのです。たとえ貧しい物でもイエスさまを味の素のように振りかけながら食べるとおいしくなる、と言う意味のことを仰ったのです。私は聞いていて、少し奇妙に思いました。随分誇張しているのではないか。でも今考えると、パウロに少し通じるところもあるのかしら、と思います。要するに、今、供えられた食卓に不平を言わず感謝していただきます、と言う意味ではないかと思います。そのご夫婦は教会のため、良く仕え伝道されました。ご夫人は天国に召され、ご主人はホームに入られている様子です。懐かしく思い出しました。14節に「それにしても、あなたがたは、よくわたしと苦しみを共にしてくれました」とあります。

今朝は「部落解放祈りの日」に制定されていますので、苦しみという言葉を通して、お話したいと思います。部落解放は同和教育とも置き換えられます。同和教育とは不当な身分的差別や蔑視を無くし、すべての人が真に自由・平等な社会を目指す教育です。皆様方もすでに勉強されていると思いますが、江戸時代に士農工商と言う身分制度がありまして、士とは武士のことですね、農は農業の人、工は工具を作ったりする人、商は商人です。その下に最下層の人々がおられるのです。その方々は言われのない扱いを受け差別されてきたのです。人のしたくない仕事、危険な仕事をその人たちに押し付けるのです。人間の深い罪の故です。その差別は今も残っているとされていて、例えば就職する時、結婚する時等に相手が部落出身の人だと不採用や破談になるのです。私は初めそういうことがあるなんて信じられなかったのですが、ネットでいじめがあって自殺する人を知ると、やはり人間の深い罪性を思い、実際あるのだと思うようになりました。それで、日本基督教団の部落解放方針を読んだのですが、こうありました。「私たちの教会は日本の社会に建てられていますが、そこには様々な差別や抑圧が存在しています。部落差別はその一つです。生まれ（血筋・家柄・出身地・居住地）によって人間を卑しめ、排除するものです。このために多数の人々が、

日本の歴史を通して全国各地で辛酸をなめさせられてきました」とありました。日本基督教団は1981年に「部落解放センター」を起し取り組んできたということです。それで今朝皆さんで共同の祈りを交読したのです。実は私はこの教会で初めてなのでした。リタニーを交読したのは、でも交読して良かったと思います。私たちは漠然と頭ではわかっているけれど、改めてリタニーを読むことによって、よりはっきりと頭にイエスさまの福音が頭にしみ込めます。それがいいですね。最後にあるのですが、私たちの心の中にある「隔ての中垣」を取り除いてください、とありますが、心にずしんと落ちます。私たち教会に行っている者が、案外差別をしているかもしれません。清い聖霊が与えられて、もっとイエスさまに近づきたいと思います。福音書を読むと感じるのですが、イエスさまの行動です。驚きます。何に驚くのかと言うと、その当時罪人と思われて、人々から差別されていた人々に積極的に中に入って行く行動力です。普通の人間は避けるのです。行きたくはないのです。ある日のこと、イエスさまが山を下りられると、一人のらい病の人がイエスさまに近寄り、「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と言ったのです。すると主イエスは手を差し伸べてその人に触れたのです。「よろしい。清くなれ」するとらい病は清くなったのです。らい病になると、家を追われ洞窟で暮らさなければなりません。家族が時々、食料や日用品を持ってくるのです。けれど、主イエスの心に差別・偏見のお気持ちは全くないのです。

私は昔、静岡県御殿場にある神山教会に行きました。神山教会はハンセン病患者のため建てられた教会ですが、平地に建てられておらず、丘を登って細い道を上がってやっと教会があるのです。きっと近所から病気がうつると困るから近くに建てないでくださいと言われて、町から遠いところに建てられたのかもしれませんが。ですから、生活の日用品はトラックで運ばれてくるのです。すでにプロミンといういいお薬が出ているので不治の病ではなくなったのです。聖書にあるらい病は今日、ハンセン病と言われているのです。けれど皆から日本でも差別され、忌み嫌われ、偏見の目で見られ一緒には暮らせませんでした。そういう歴史を振り返って部落解放祈りの日を覚えて感謝です。

15 節から読むと、パウロはテサロニケでの伝道から、フィリピ教会のみ、贈り物を受け取っていたようです。「もののやり取りでわたしの働きに参加した教会はあなたがたのほかに一つもありませんでした」と言っています。フィリピの教会は困窮しているパウロを金銭的に支え援助したのです。パウロに無限の富である福音の伝道を負っているフィリピの教会はその負債を忘れず、贈り物を送ってパウロの働きに参加しました。そのことをパウロは忘れないでいるのです。ただ、パウロとしては、ただ贈り物を求めているのではなく、豊かな実を、果実を望んでいるのです。豊かな実、果実とは霊のたからが愛の行為によって増やされていくことがパウロの望みなのでした。1 8 節に「香ばしい香りであり、神が喜んで受けてくださるいけにえです」と言っています。パウロは旧約聖書のささげもののイメージを借りています。その良い香りが、天にまで、神のもとにまで達し、神が喜んで受けてくださ

る燔祭の供え物だと言っています。19節で言っていることは、神はフィリピの人たちの一切の必要を無限の富の中から、主イエス・キリストにあって示された恵みの中に満たしてくださるに違いないと言っているのです。最後に謎めいた言葉があります。パウロは結びの言葉で皆によろしくと言っていますが、特に22節、「すべての聖なる者たちから、特に皇帝の家の人たちからよろしくとのことと書かれています。ここが意味不明なのです。皇帝の家の人、口語訳では「特にカイザルの家の者たちからよろしく」とあります。カイザルの家の者たちとは誰なのか、これは皇帝の近親者だけではなく、宮中に仕える役人や奴隷ではないでしょうか。恐らく捕らえられているエフェソにあるローマの総督邸にいる奴隷か使用人を指したのではないかという意見もあります。パウロは囚われの身ですが、日常接している看守の人たち、番人に証をして信じる者たちもいたかもしれません。そういう人たちからよろしくとパウロは頼まれていたのです。それで最後に挨拶に入れたのではないのでしょうか。パウロは苦しみを共にするたくさんの人々に囲まれて幸せだったでしょう。